

# 自作を再生する井上ひさしの手法

－『藪原検校』の音楽的趣向について－

坂本 麻実子

INOUE Hisashi's Technique for Recycling his Works

－ A Musical Idea of *Yabuhara-Kengyo* －

SAKAMOTO Mamiko

E-mail : msakamot@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：井上ひさし, 藪原検校, 表裏源内蛙合戦, 音楽劇, 語り物

keywords : INOUE Hisashi, *Yabuhara-Kengyo*, *Omoteura-Gennai- Kaerugassen*, Music Drama, Narrative

## 1. 自作を再生した井上ひさし

筆者は井上ひさし（1934-2010）の音楽劇の考察を続けているが、『藪原検校』（1973年7月初演）は杉の市・二代目藪原検校という架空の悪座頭の一代記であり、井上の舞台作品の名作の一つに数えら

れ、国内外で上演されてきた<sup>(1)</sup>。『藪原検校』は井上の劇作活動においても節目となった作品である。表1に示すように、『藪原検校』以前の音楽劇（デビュー作『日本人のへそ』1969年2月初演、『表裏源内蛙合戦』1970年7月初演、『十一ぴきのネコ』1971年4月初演、『道元の冒険』1971年9月初演、

表1. 『藪原検校』関連年表

年月	『藪原検校』	年月	補足事項
1971.6	『藪原検校』原作の評伝「藪原検校」発表（『中央公論臨時増刊歴史と人物3』）	1969.2	『日本人のへそ』初演（テアトル・エコー）
		1970.1	『それからのブンとファン』原作のジュニア小説『ブンとファン』発表（朝日ソノラマ）
		1970.7	『表裏源内蛙合戦』初演（テアトル・エコー）
		1971.4	『十一ぴきのネコ』初演（テアトル・エコー）
1973.5 1973.7 1974.3	『藪原検校』発表（『新劇』） 『藪原検校』初演（五月舎・西武劇場） 戯曲集『藪原検校』刊行（新潮社） ※「二通の手紙－あとがきにかえて－」に原作の評伝「藪原検校」を掲載。	1971.9	『道元の冒険』初演（テアトル・エコー）
		1972.8	『たいこどんどん』原作の文芸小説『江戸の夕立ち』発表（別冊文藝春秋）
		1973.3	『珍訳聖書』初演（テアトル・エコー）
1975.1 1975.9 1978.8 1985.6 1986.1		1975.1	『それからのブンとファン』初演（テアトル・エコー）
		1975.9	『たいこどんどん』初演（五月舎）
		1978.8	『日の浦姫物語』初演（文学座）
		1985.6	『國語元年』原作の連続テレビドラマ『國語元年』放送開始（NHK総合）
		1986.1	『國語元年』初演（こまつ座）

『珍訳聖書』1973年3月初演。以上、初期5作品と呼ぶ)はすべてテアトル・エコーに書き下ろしたが、『藪原検校』は五月舎・西武劇場に書き下ろし、それを機に井上は書き方を変えた。井上のエッセイ「七十四歳までに五十本」によれば、初期5作品は「ある主題について思いついた事柄を、まず第一幕ですべて投げ出してみる。そして、第二幕では、第一幕で投げ出され、ほうり出され、分散された事柄を出来るだけ手早くかき集めてみせる」(井上1982a:183)という「分散と集約」の方法で書いたが、次回作は「どんなやり方も方法論もなしで、その都度、右往左往し、泥の中を這いずり廻りながらやってみよう」(井上1982a:184-185)と決めた。その結果、『藪原検校』において井上は自作の再生を試みた。『藪原検校』は井上が1971年6月に『中央公論臨時増刊歴史と人物3』に発表した「藪原検校」という評伝(井上1971)を音楽劇に脚色し、1973年5月に『新劇』に発表され、同年7月に初演された。なお、「藪原検校」は1974年3月に刊行された戯曲集『藪原検校』(井上1974)のあとがき「二通の手紙—あとがきにかえて—」の中にも掲載された(井上1974:178-198)。以下、原作の評伝は「藪原検校」、音楽劇は『藪原検校』と区別する。

井上はすでに馬場のぼるの絵本『11ぴきのねこ』を脚色して音楽劇『十一ぴきのネコ』を書いていたが<sup>(2)</sup>、『藪原検校』は自作を再生した初めての音楽劇であり、その点で『それからのブンとフン』(1975年1月テアトル・エコー初演。原作は『ブンとフン』というジュニア小説)、『たいこどんどん』(1975年9月五月舎初演。原作は井上が直木賞受賞後第1作として発表した文芸小説『江戸の夕立ち』)、『國語元年』(1986年1月こまつ座初演。原作はNHK総合放送の連続テレビドラマ『國語元年』の台本)の先駆けとなった<sup>(3)</sup>。

それにしても、井上はわずか12頁の評伝を上演時間が3時間にもなる音楽劇に膨らませた。長大化した最大の要因は、もちろん、劇中に盛り込まれた音楽にあるだろう。その音楽の使用に関しても、井上は『藪原検校』以前に書いた音楽劇の手法を『藪原検校』で再生したとは考えられないか。そこで「藪原検校」と『藪原検校』の音楽場面を比較し、評伝から音楽劇に再生するためにどのような手法を用いたのかを明らかにし、その上で『藪原検校』と共通の手法を用いた音楽劇を過去の作品の中に探り、

『藪原検校』で見せた自作の再生という手法の成果を検証したい。

## 2. 歌と語り物を取り入れた評伝「藪原検校」

まず「藪原検校」は井上自身が杉の市の一代記(1742生, 1778没と設定)を散文で語る体裁をとり、特に章段は設けていない。盲目で生まれ貧困と差別の中で育ち、希代の悪党となった杉の市の一生は口上→塩釜篇→道行→江戸篇で構成され、井上は「調子をつけてすらすらすらと」語るため、散文の中に歌と語り物を取り入れた。表2に「藪原検校」の音楽場面を示す。口上では座頭たちが苛酷な運命を嘆く「のぼりのぼれば流れ山」(歌1)、塩釜篇では杉の市のプロフィールを紹介する「藪原検校のテーマ」(歌2)、道行では杉の市が故郷で殺人を犯し江戸へ逃亡する道中に歌う「ひとり殺して五百両」(歌3)、江戸篇では高利貸によって金と地位を手に入れた杉の市・二代目藪原検校の得意絶頂の歌「ものは言う内に聞け」(歌4)、杉の市の悪運が尽きるきっかけとなった世人の噂歌「藪原屋敷」(歌5)、以上、歌は5曲である。なお「藪原検校のテーマ」は幕切れにも歌う。また、塩釜篇では井上は語り物の詞章(早物語「餅合戦」井上版<sup>(4)</sup>)も書き(語り1)、悪事を働く一方で語り物の名手でもあった杉の市の見せ場を作った。

## 3. 「藪原検校」と『藪原検校』の音楽場面の対応関係

一方、『藪原検校』は「藪原検校」を20の小場面再構成し、1場は口上、2~8場は塩釜篇、9~10場は道行、11~20場は江戸篇である。そして「盲太夫」という語り手役がギター奏者の伴奏(井上はギターに「三味線のような音色」を求めた)で藪原検校の一代記(1760生, 1788没と修正)を語り、役者たちは盲太夫の語りに合わせて実演する<sup>(5)</sup>。『藪原検校』は「藪原検校」に挿入した歌と語り物をすべて取り込むとともに(ただし、タイトルをつけたり、歌詞や詞章に修正を加えている)、さらに歌と語り物を追加した(歌①~⑩、語り①②)。また声色を遣うパフォーマンス(声色①)も取り入れた。以下、表2に基づき「藪原検校」と『藪原検校』の音楽場面の対応関係をみていく。

表2. 評伝「藪原検校」と音楽劇『藪原検校』の音楽場面の対応関係

評伝「藪原検校」		音楽劇『藪原検校』		
通し番号 ( )内場面	タイトルまたは歌いだし	場面	通し番号	タイトルまたは歌いだし
歌1 (口上)	「のぼりのぼれば流れ山」	1 (口上)	歌①	「流れ山越え節」
歌2 (塩釜篇)	「藪原検校のテーマ」	2 (塩釜篇)	歌②	「藪原検校のテーマ」
			歌③	「かねはふね」
		3	歌④	「子守唄」
		4	歌⑤	「濡れ場」
		5	語り①	奥浄瑠璃「牛若東下り・第一段」
語り1	早物語「餅合戦」(井上版)		語り②	早物語「黒白餅合戦廻り裏ヶ浦の戦い」
		6		
		7		
		8		
		9 (道行)	歌⑥	「阿武隈川舟唄」
歌3 (道行)	「ひとり殺して五百両」	10	歌⑦	「道行」
		11 (江戸篇)	声色①	「日本橋の声たち」(日本橋界隈の物売り, 生活音を口真似する)
		12		
		13	歌⑧	「春の花見に潮干狩り」(江戸名所づくし)
		14	歌⑨	「小壺たこ壺油壺」(壺づくし)
歌4 (江戸篇)	「ものは言う内に聞け」(芸者づくし)	15	歌⑩	「ものは言う内に聞け」(芸者づくし)
		16		
		17		
歌5	「藪原屋敷」	18	歌⑪	「むこうの屋敷」
		19		
歌2	「藪原検校のテーマ」(2回目)	20	歌②	「藪原検校のテーマ」(2回目)

備考：井上1971, 1984aより作成。

口上の「のぼりのぼれば流れ山」(歌1)は「流れ山越え節」(歌①)というタイトルがついて1場で座頭たちが歌う。塩釜篇では、「藪原検校のテーマ」(歌2)は新たに歌詞を加えた拡大版「藪原検校のテーマ」(歌②)となって2場で座頭たちが歌う。そして「藪原検校」の「藪原検校のテーマ」(歌2)と「ひとり殺して五百両」(歌3)の間に『藪原検校』は新曲を4曲追加した(歌③～歌⑥)。塩釜篇が始まる2場では杉の市の父親が生まれてくる赤子の産着を買う金欲しさから金貸座頭を殺すが、そのとき座頭は「かねはふね」(歌③)で盲人社会の出世(最下位の座頭から最高位の検校まで)は金

次第だと歌う。3場で杉の市の両親が歌う「子守唄」(歌④)によって、杉の市は父の座頭殺しの報いで盲目で生まれ、座頭となる運命であることが予告される。4場は少年杉の市が師匠琴の市(井上は「藪原検校」の琵琶の市から名称を変更した)の妻お市と関係する場面で、2人は「濡れ場」(歌⑤)を歌い、小悪党杉の市とダーク・ヒロインお市を印象づける。道行の9場では、母親と琴の市を殺した杉の市が江戸へ向かう道中、旅人たちが「阿武隈川舟歌」(歌⑥)を賑やかに歌うのを聞く。「藪原検校」の「ひとり殺して五百両」(歌3)は「道行」(歌⑦)というタイトルがついて10場で盲太夫が歌う。次

に示すように、「ひとり殺して五百両」は一から十までの数え歌形式の道中歌になっており、十で江戸に到着して上がりとなる。→印で示すように「ひとり殺して五百両」と「道行」の歌詞には幾つかの違いがあるが、特に「ひとり殺して五百両」の「いつしか辿る悪の細道」の「辿る」は「道行」では「深まる」となり、故郷を出奔し悪道に堕ちていく杉の市の絶望と孤独が強調された。

**ひとり殺して五百両**

ひ(一)とり殺して五百両  
→五十両(「道行」)

ふ(二)たり殺めて百五両  
→八十両(「道行」)

三筋の糸ももつれ勝ち  
よ(四)る見る夢にうなされながら  
い(五)つしか辿る悪の細道  
→深まる(「道行」)

む(六)りを承知で千両ためて  
な(七)により欲しい検校位  
や(八)ま川越えてはるばると  
こ(九)こはお江戸の日本橋  
とう(十)でとうとう着きにけり

なお塩釜篇の5場には琴の市・杉の市の師弟による語りの場面がある。井上はまず琴の市に奥浄瑠璃『牛若東下り・第一段』(語り①)の末尾<sup>(6)</sup>を少々語らせた上で、杉の市に早物語「黑白餅合戦 罫屋裏ヶ浦の戦い」(語り②)(「藪原検校」語り1早物語「餅合戦」井上版の拡大版)の全段を語らせ、師匠を凌ぐ杉の市の芸を見せつけた。

11場から江戸篇が始まり、『藪原検校』では「藪原検校」の「ひとり殺して五百両」(歌3)と「ものは言う内に聞け」(歌4)の間の部分に声色を遣ったパフォーマンスと新曲2曲を追加した。まず、盲目の杉の市は江戸という町を種々雑多な大小の音の洪水と認識したので、11場では「日本橋の声たち」(声色①)と銘打って役者たちが日本橋界隈の物売り声、生活音を次々に口真似して江戸の賑わいを聴覚的に表現した。やがて杉の市は同じ盲人でも学問による出世を目指す塙保己一(1746-1821)を知る。当時、保己一の身分は座頭と検校の間の勾当であった。盲人が晴眼者と対等になるための最大の武器は記憶力と主張する保己一は13場で江戸名所づくし「春の花見に潮干狩り」(歌⑧)を歌うが、

杉の市は金こそ最大の武器と反論した。そして前科を隠して初代藪原検校に弟子入りして高利貸に励み、「道行」に歌われたように金の力で座頭から検校への出世を企んだ。14場では杉の市は借金を返せない女たちを凌辱して壺づくし「小壺たこ壺油壺」を歌う(歌⑨)。ついに杉の市は師匠藪原検校を殺して二代目を名乗り、「ものは言う内に聞け」(芸者づくし。歌4)は『藪原検校』では遊興にふける二代目藪原検校を羨む座頭たちが歌う(歌⑩)。「藪原検校」の「藪原屋敷」(歌5)と『藪原検校』の「むこうの屋敷」(歌⑪)はどちらも藪原検校は殺人鬼だと噂する歌であるが、次に示すように歌詞は全く異なる。

藪原屋敷	むこうの屋敷
藪原屋敷は不思議な屋敷	むこうの屋敷は
鬼が棲むやら蛇がひそむやら	鬼めの方角じゃ
門を潜った女が九人	日暮れになれば
生きて出たのは婆さん一人	さっさと逃げるがよかる
あとの八人むうにゃむにゃ	さっさと逃げるがよかる
藪原屋敷は不思議な屋敷	石けり なわとび かくれんば
江戸の不思議がまたふえた	手まりころがる
	どうしよう
	さっさと逃げるがよかる
	さっさと逃げるがよかる
	長い影を引き擦って
	白眼剥き出し 杖引いて
	夕間暮れの横丁を
	藪原検校が通る
	杉の市が通る

「藪原屋敷」は江戸の庶民たちが歌う。一方、「むこうの屋敷」は塩釜から杉の市を追って江戸に出てきたお市が歌い、その中で殺人鬼藪原検校の昔の名は杉の市だと告発している。そのため、お市は杉の市によって口封じに殺されるが、お市殺しから足がついて過去の悪事を暴かれた杉の市は「三段斬り」という極刑に処され、それを見物する江戸の庶民たちが興奮しながら「藪原検校のテーマ」(2回目)を歌って幕となる。

#### 4. 『藪原検校』と『表裏源内蛙合戦』の関係

ところで、井上は「藪原検校」に先立ち1970年7月に初演された『表裏源内蛙合戦』(井上1984)の

中で金貸座頭を登場させていた。『表裏源内蛙合戦』は江戸中期に多方面で才能を発揮した平賀源内(1728-1879)の一代記であり、その中で源内は本草学の知識を活かして物産会を開くために金貸座頭(鳥山検校と手下の座頭たち)を訪ねたとき、彼らの非道な貸付金取り立てを目撃した(第1幕9場)。当時、高利貸は盲人の特権的な職業であった。そこで井上は『表裏源内蛙合戦』では端役にすぎない金貸座頭の所業を杉の市のそれに読み替えて「藪原検校」の中に再生し、借り手の家に居座る「居催促」、暴力に訴える「強催促」に分けて貸付金取り立て法を解説した。『藪原検校』になると貸付金取り立て法は「居催促」、泣き落としで迫る「泣き催促」、 「強催促」の三段階に拡張し、盲太夫の解説に合わせて杉の市役者が実演する。

さて『表裏源内蛙合戦』と『藪原検校』のつながりは金貸座頭の挿話に限らない。この2作品にはハンディを背負った地方出身者を主人公とするという共通点がある。高松藩の足軽に生まれた源内は、最新の学問である蘭学を武器に江戸へ出て幕府に仕官しようと目論むが、高松藩では源内の致仕を認める代わり他藩への仕官を禁じたので、源内は浪人のまま才能も正当に評価されず、最後は殺人を犯して獄死した。源内は蘭学、杉の市は金と手段は異なるが、ともに封建社会に挑戦し、結局は社会の側から断罪された。江戸時代の地方出身者の野望と挫折の一代記を語るという点で、『藪原検校』は先行する『表裏源内蛙合戦』の音楽劇の手法を再生した可能性を考えられないだろうか。そこで『表裏源内蛙合戦』の音楽場面(表3)を検討し、『藪原検校』の音楽場面(表2)と照合させてみよう。

井上が「抱腹絶倒ミュージカル」(井上1984a:161-162)と呼ぶように、『表裏源内蛙合戦』はミュージカル・ショーの形式をとっており、第1幕は14場、第2幕は11場、全2幕26場で、場面の一つ一つは短い数は多く、場面転換が早い。源内の一代記は、口上(第1幕1場。出演者一同による)→高松篇(第1幕1~5場)→道行(第1幕6場前半。道行歌あり)→長崎篇(蘭学修行篇。第1幕6場後半~7場)→江戸篇(第1幕8場~第2幕6場)→道行(第2幕7場前半)→秋田篇(就職運動篇。第2幕7場後半)→江戸篇(第2幕8~11場)で構成され、音楽場面は歌を主体に、踊り、語り、声色、演芸、大道芸、寸劇も取り込んで次から次へと見せ

ていく。歌は源内の波瀾万丈の生涯の要所要所に挿入され、源内の蘭学者、本草学者にとどまらない多面的な顔-洋風画家源内(歌13)、博物学者源内(歌14)、発明家・興行師源内(歌15)、医学者源内(歌17)、広告文案家源内(歌19)、エレキテル製造者源内(歌20)-を紹介する場面にも用いられ、全部で20曲を数える。また、戯作者でもあった源内が自作『風流志道軒伝』を講釈する(語り1)場面も設けられた。一方、『藪原検校』もミュージカル・ショー形式で書かれ、全1幕20場で口上(1場。盲太夫による)→塩釜篇(2~8場)→道行(9~10場)→江戸篇(11~20場)で構成される。『表裏源内蛙合戦』では口上→高松篇→道行→江戸篇という、「地方(故郷)→江戸」の幹線に蘭学修行の長崎篇、就職運動の秋田篇の2本の支線が付加されていたが、『藪原検校』の方は「地方(故郷)→江戸」の幹線のみで展開する。挿入歌は「藪原検校」の5曲から追加して全部で11曲である。『藪原検校』は一幕ものであるから、場面や歌の数では『表裏源内蛙合戦』に見劣りがしない。また源内が自作を講釈する(語り1)ように、杉の市も「白黒餅合戦困炉裏ヶ歌の戦い」(語り②)を語っており、どちらも主役の語り物が見せ場となっている点も見逃せない。ただし『藪原検校』は「親の因果(=悪業)が子に報う」<sup>(7)</sup>という陰々滅々とした因果斬なので『表裏源内蛙合戦』のような「抱腹絶倒」の要素は少ないと言える<sup>(8)</sup>。

それでは井上は『表裏源内蛙合戦』のミュージカル・ショーの形式を『藪原検校』で再生して何をしていたのだろうか。普通、自作を再生する者はその作品を改良し、深化発展させる方向を目指すだろう。その意味で、筆者は『表裏源内蛙合戦』に比べて『藪原検校』では語り手の存在感が増していることに注目したい。『表裏源内蛙合戦』の語り手の娘義太夫4名は第1幕2場に登場し「さればによりて さっそくに」(歌1)と歌って源内の一代記を語り始め、役者たちが実演していく。しかし娘義太夫役は他の役も兼ねるために3場以降は登場しない。一方、『藪原検校』の語り手の盲太夫は三味線やつしのギター奏者を伴って開幕の口上から終幕の杉の市の刑死まで、時には舞台上で実演する役者たちと言葉を交わしながら、杉の市の一代記を語り通す。井上は語り手の盲太夫の役柄を重くして<sup>(9)</sup>、『表裏源内蛙合戦』では中途半端な感のあった語り物の枠

表3. 『表裏源内蛙合戦』の音楽場面

場面	通し番号	タイトルまたは歌い出し
I-1 (口上)		音楽場面なし
I-2 (高松篇)	歌1	「さればによりて さっそくに」
	歌2	「子守唄」
I-3		音楽場面なし
I-4	歌3	「手鞠唄」
	歌4	「てがき あがき もがき」
I-5	歌5	「足軽 足軽 ひだるがる」
I-6 (道行) (長崎篇)	歌6	「讃岐高松後にして」
	歌7	「長崎はちゃんぼん～長崎は、きょうも、雨だった！」 ※長崎の歌謡ステージ。踊り、演芸、寸劇を入れる。
I-7		音楽場面なし
I-8 (江戸篇)	歌8	「人が十人集まれば」
I-9	歌9	「この世は暗く お先は真っ暗」
I-10	歌10	「平賀源内 前途有望」
I-11	歌11	「だれに厭味を 云われても」
I-12	声色1	四季の物売りづくし ※季節の移り変わりを暗示する。
I-13	歌12	「今は東の人の月」 ※吉原遊郭の歌謡ステージ。踊りを入れる。
I-14	歌12	「今は東の人の月」(2回目。歌の後半部分のみ)
II-1	語り1	「風流志道軒伝」→戯作者源内
II-2	歌13	「色に色 色色に 色を重ねろ」→洋風画家源内
	歌9	「この世は暗く お先は真っ暗」(2回目)
II-3	歌14	「酒と女に日を送り」→博物学者源内
II-4		音楽場面なし
II-5	歌15	「両国は地獄」(物売り・見世物づくし)→発明家・興行師源内 ※両国の歌謡ステージ。声色、大道芸を入れる。
II-6	歌16	「美しい明日を お前は持っているか」
	歌17	「腑分ソング」→医学者源内
II-7 (道行) (秋田篇)	歌18	「彼岸来るとて 何たのしかろ」
	歌11	「だれに厭味を 云われても」(2回目) →ただし途中「出世はこの世の 美しい花」から
II-8 (江戸篇)	歌18	「彼岸来るとて 何たのしかろ」(2回目) →ただし途中「死んでいくのが 何うれしかろ」から
	歌19	「夕涼み 団扇片手に ぶらぶらと～イエイエ！」→広告文案家源内
II-9	歌20	「エレキテル・ブルース」→エレキテル製造者源内
II-10		音楽場面なし
II-11	歌16	「美しい明日を お前は持っているか」(2回目)

備考：井上1984aより作成。

組みを強化した。悪座頭の因果斬である『藪原検校』形式を再生することで音楽性の強い語り物として生は、『表裏源内蛙合戦』のミュージカル・ショーのまれ変わった。

## 5. 井上流語り物の誕生

井上は「どんなやり方も方法論もなし」に音楽劇『藪原検校』を書いたと言う。しかし、「芝居においては、一が趣向で二も趣向」（井上1982c:191）と断言する井上なら『藪原検校』にも新しい趣向を追求することを忘れないだろう。『藪原検校』で見せた「自作の再生」も井上には音楽劇の一つの趣向ではないだろうか。井上が『藪原検校』の中に再生した「自作」は二つあると筆者は考えている。一つはもちろん評伝「藪原検校」であり、もう一つは音楽劇『表裏源内蛙合戦』である。自作の再生は井上には初めての試みではあったが、同名の評伝を音楽劇に再生するのは意外性に乏しく、井上が重視する趣向としては物足りないと思う。井上自身も「たとえ趣向があってもそれが嵌らぬ趣向ならばないのにさえ劣る」（井上1982c:192）と言うほどなので、『藪原検校』に再生された「自作」が「藪原検校」だけとなると「嵌まった」とは言えない。『藪原検校』では、「藪原検校」の段階から『表裏源内蛙合戦』の金貸座頭の挿話を再生していた。さらに『表裏源内蛙合戦』のミュージカル・ショーの形式および封建社会に抗して敗れた者の一代記という枠組みも『藪原検校』に再生されていた。誰にでもわかる「藪原検校」と、意表を突くように発表ずみの音楽劇の中から選んだ『表裏源内蛙合戦』。『藪原検校』で見せた自作の再生という趣向には二重の仕掛けが施されていた。

それにしても、自作の再生という趣向に一番嵌まったのは井上自身であろう。前述したように、井上は『藪原検校』以後も自作を再生して『それからのブンとファン』、『たいこどんどん』、『國語元年』の3作品を書いたが、それらの原作はジュニア小説、文芸小説、テレビドラマの台本とジャンルを異にしており、これも趣向を新たにするために井上が意図的に選択した結果であろう。さらに井上は『藪原検校』の語り物の形式も『藪原検校』初演から5年を経て『日の浦姫物語』（1978年7月文学座初演。表1参照）で再生したと考えられる。『藪原検校』は盲太夫の語り、ギター奏者の伴奏で物語が進行するが、『日の浦姫物語』では語り手は「説教聖」、伴奏は「三味線弾きの女」となり男性ペアから男女ペアに変わった。三味線弾きの女は演奏だけでなく説教聖の語りに突っ込みを入れ、語りの伴奏者から合方に

成長しているが、実は説教聖と三味線弾きの女は兄妹ながら子をなした関係にあり、二人は近親相姦という『日の浦姫物語』のテーマを体現する存在になっている（井上1984b）。説教は仏教の教えを民衆にわかりやすく説く話芸から発展した語り物であるが、説教には繰り人形と提携して人形芝居として興行もしていた。そうすると『日の浦姫物語』の登場人物を演じている役者は実は人形芝居の繰り人形なのである。語り手と三味線奏者と役者が演じる繰り人形による芝居仕立ての一代記という『日の浦姫物語』の原型は『藪原検校』にあり、さらには『表裏源内蛙合戦』までさかのぼることができる。井上流の語り物は自作の再生という趣向の追求から生まれたと言えるだろう。

### 注.

- (1) 参考までに『藪原検校』は1973年5月の初演（高野長英主演）以後も1984年9月松竹公演（中村勘九郎、のちの一八世勘三郎主演）、2003年3月地人会講演（嵐広也主演）、2007年5月ホリプロ・Bunkamura公演（古田新太主演）、2012年6月こまつ座・世田谷パブリックシアター公演（野村萬斎主演）等、さまざまな俳優によって上演されてきた。また1990年のエジンバラ国際芸術祭における地人会公演（原康義主演）は最優秀演劇賞を受賞した。
- (2) 『十一ぴきのネコ』と馬場のぼる『11ぴきのねこ』の対応関係については坂本2013参照。
- (3) 『それからのブンとファン』、『たいこどんどん』、『國語元年』のとそれぞれの原作との対応関係については坂本2003および2014参照。
- (4) 「そもそも小豆餅や黍餅」は本田安次編『語り物・風流二』に収録された早物語「餅合戦」（本田1970:239-241）を下敷きにして井上が創作した。
- (5) 井上は「なにしろはじめてのことばかり」というエッセイの中で「劇の展開をすべて語り手に預けてしまったのも、ギターという楽器を登場人物と同等に扱ったのも、登場人物がひとり残らず盲人というものはじめてである」（井上1982b:187）と述べている。
- (6) 琴の市の「牛若東下り」の詞章は『語り物・風流二』（本田1970:192）に従う。
- (7) 因果応報のたとえとして「因果の綱」という言

い方があるが、井上は『藪原検校』の舞台に綱を張りめぐらすように指示した。

- (8) 井上自身も「お客様に笑っていただくための工夫を、これだけ抑え、かつ避けたのも生まれてはじめてだ」(井上1982b:187)と言う。
- (9) 盲太夫役について、井上は主役の杉の市役、ヒロインのお市役と同等に「終始変ることなく一貫してその役を演じ」、この三役以外は「六人の座頭(男三人、女三人)に扮した俳優がとっかえひっかえ演じる」(井上1984:572)と指示して差別化を図った。

### 参考文献

- 井上ひさし(1971)「藪原検校」『中央公論臨時増刊歴史と人物3』,6月,290-301頁
- 井上ひさし(1974)『藪原検校』東京:新潮社
- 井上ひさし(1982a)「七十四歳までに五十本」(初出1973)『パロディ志願』(エッセイ集1,中公文庫)収録,182-185頁,東京:中央公論社
- 井上ひさし(1982b)「なにしろはじめてのことばかり」(初出1973)『パロディ志願』(エッセイ集1,中公文庫)収録,186-187頁,東京:中央公論社
- 井上ひさし(1982c)「芝居の趣向について」(初出1974)『パロディ志願』(エッセイ集1,中公文庫)収録,191-193頁,東京:中央公論社
- 井上ひさし(1984a)『井上ひさし全芝居 その一』東京:新潮社 ※『表裏源内蛙合戦』、『藪原検校』収録。文中の引用は本書による。
- 井上ひさし(1984b)『井上ひさし全芝居 その二』東京:新潮社 ※『日の浦姫物語』収録。
- 井上ひさし(2007)『藪原検校』(DVD)東京:ポニーキャニオン
- 井上ひさし(2010)『表裏源内蛙合戦』(DVD)東京:コロムビアミュージックエンタテイメント
- 井上ひさし(2013)『日の浦姫物語』(DVD)東京:ポニーキャニオン
- 坂本麻実子(2003)「唱歌から読む『國語元年』」『桐朋学園大学研究紀要』第29集,10月,49-62頁
- 坂本麻実子(2013)「『11ぴきのネコ』劇中歌と原典の関係ー選曲の問題を考えるためにー」『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究』第7号,1月,93-102頁
- 坂本麻実子(2014)「1975年の井上ひさしー自作の小説を音楽劇に脚色したときー」『富山大学人間発達科学部紀要』第8巻第2号,3月,149-145頁
- 本田安次(1970)『語り物・風流二』(日本の民俗藝能IV)東京:木耳社

(2014年10月20日受付)

(2014年12月10日受理)